

兵 庫 県
保 險 医 協 会

加古川
高砂

支部ニュース

No. 240

2017年1月5日

発行

兵庫県保険医協会 加古川・高砂支部

(連絡先) 神戸市中央区海岸通一丁目三三

神戸フコク生命海岸通ビル五階

電話 〇七八 (三九三) 一八〇一

新年のごあいさつ

医療・社会保障優先の政治への転換を

加古川・高砂支部

支部長 岡部 桂一郎



新年明けましておめでとうございませう。

旧年中は、当協会諸活動にご理解、ご協力賜わり厚く御礼を申し上げます。

加古川・高砂支部では、この一年の活動として、「円滑な医院継承」を考える医院経営研究会、接遇の基本とクレーム対応を中心にした職員接遇研修会、医療機関で知っておきたい医療・福祉制度を学習する研究会を開催しました。昨年末の総会では、認知症患者の在宅・施設療養の継続を可能にする「コウノメソッド」をテーマに講演会を行うなど、会員の要求にそった様々な企画を行ってまいりました。また、今後の活動として、2月には「地域医療を考える懇談会」を加古川市で実施予定で

す。「地域包括ケアと多職種連携」をテーマに講演会を考えております。いずれも先生方のご協力なくしてはできないことで、今後も引き続きご協力をお願いしたいと思います。

さて、昨今の医療をとりまく情勢といたしましては、高齢者の窓口負担限度額の引き上げ、療養病床入院患者の光熱水費自己負担増、後期高齢者医療制度の保険料軽減特例の廃止など「高齢者泣かせの負担増」計画が強行されようとしています。医療費の抑制を目的としたこれらの制度改悪について、私たちは、断固として反対し、診療報酬引き上げ、患者窓口負担の軽減など社会保障改善のため努力を尽くすとともに、社会保障優先の政治への転換を強く求めて行きたいと思っております。

このような情勢の中、当支部の活動方針として、以下の点を主要課題として取り組みたいと考えております。

1、会員の要望をもとに、学術研究会や気軽に参加できる会員懇談会などを積極的に行う。また、在宅医療への取り組みや、

医科歯科共通の研究会などを開催する。

2、保険請求や審査、指導・監査に関する情報交流や医院経営問題など、協会ならではの活動にいつそう力を注ぐ。

3、引き続き「接遇研修」「医療安全管理対策」に関する研究会や講習会など、スタッフも含めた企画を引き続き開催する。

4、未入会員対策として、引き続き新規開業医とともに勤務医対策にも力をそそぐ。

5、日常診療に役立つ情報、地域の情報提供を行い、会員相互のコミュニケーションを培う支部ニュース作りをめざす。

6、支部活動の基礎となる幹事会の充実のため、出席者の確保をふくめ改善をめざす。そのために会員の積極的な参加を促す。

最後に、支部活動は会員さんであれば、いつでもだれでも気軽に参加いただけます。いろいろなアイデアや知恵をお貸し下さいますようお願いして、ごあいさつとさせていただきます。



第35回支部総会・記念講演会を開催

「認知症は治らない病気」とあきらめる前に

加古川・高砂支部は12月3日、加古川プラザホテルで第35回総会を開催。2015年度活動のまとめと2016年度の方針を確認し、「身近に存在し役に立つ支部活動」を基本に「学術研究会」や「審査・指導学習会」「スタッフ研修会」など、多彩な活動に取り組んでいくことを申し合わせた。支部役員体制について、引き続き岡部桂一郎先生(高砂市・協会監事)を支部長に、副支部長に西村正二先生(加古川市・協会理事)を選出し、再任された。

から専門の精神科医に紹介させていただくのが通常の流れであろうと思っておりました。易怒、暴言、暴力といった周辺症状(BPSD)のコントロールが困難な患者さんは、在宅や施設での介護が困難であるため、精神科入院もやむを得ないことであろうと、ある程度当然のことのように思っておりました。

ところが、今回、梁先生のお話をうかがったことで、全くこれまでとちがった考え方で認知症の治療について考えるようになりました。

また、記念企画として「認知症の方を精神病院入院からまもる緩和医療『コウノメソッド』について」をテーマに講演回を開催。日本ホスピスケア在宅ケア研究会副理事長で林山朝日診療所理事長の梁 勝則 先生が講師を務め、70人が参加した。参加された先生の感想文を掲載する。

認知症患者の精神病院入院の理由はその90%以上がBPSDであることから、逆にいえば周辺症状がコントロールできれば、これらの患者は精神病院に入院しなくても済むということ、内科医や在宅医が「コウノメソッド」に基づいて薬を処方していくと周辺症状が緩和され、在宅療養や施設入所の継続が可能になるということを知りました。

稀ではないため、激しい周辺症状に直面した場合、まず、認知症中核薬服用を一旦中止し、抑制系の向精神病薬を少量から開始し、症状が緩和されるまで漸増することでコントロールを図っていくことが望ましいこと、また治療の途中で副作用が出たら、薬の量や回数を減らす、休薬するなどの「微妙なさじ加減」ときめ細かい診察が大切なことがよくわかりました。

「認知症治療は緩和医療としてとらえることが出来る」ということも今回のお話をきいてとても納得できました。認知症を治らない病気としてあきらめるのではなく、認知症の患者も一人の人間としてより良い生活を送れるように日々真剣に治療にとり組まれている梁先生の姿勢に、多くの事を学ばせていただいた講演会でした。

(加古川市もと皮膚科クリニック)

佐々木 一

「認知症の方を精神科入院からまもる緩和医療『コウノメソッド』について」というテーマで梁勝則先生から興味深いお話をうかがうことができました。

私は皮膚科医で不勉強なこともあり、この講演会に参加させていただく前は、認知症の患者さんや、その御家族から相談をうけた場合、まず一般の開業医



講師の梁 勝則 先生



医師・歯科医師、在宅医療に携わる様々な職種が参加した